小塩　詞章

登場人物　前シテ・樵翁　後シテ・在原業平の霊
ワキ・都の人　ワキ連・従者　間狂言・大原の里人

ワ・連　**『次第』**花に映ろふ峯の雲。花に映ろふ峯の雲。かかるや心なるらん。
ワキ　これは下京辺に住まひする者にて候。さても大原山の花。今を盛なる由申し候程に。若き人々を伴なひ。只今大原山へと急ぎ候。
ワ・連　面白やいづくはあれど所から。花も都の名にしおへる。
ワキ　大原山の桜花。
ワ・連　今を盛と木綿花（いうばな）の。今を盛と木綿花の。手向の袖も一入に。色添ふ春の時を得て。神も交はる塵の世の。花や心に任すらん。花や心に任すらん。
シテ　**『一声』**栞して。花を翳（かざ）しの袖ながら。老木の柴と。人や見ん。年経（ふ）れば齢は老いぬ然（しか）はあれど。花をし見れば物思ひも。無しと詠みしも身の上に。今白雪を戴くまで。光に当る春の日の。長閑けき御代の時なれや。散りもせず咲きも残らぬ花盛。咲きも残らぬ花盛。四方の景色も一入に。匂満ち色に添ふ。情の道に誘はるる。老な厭ひそ花心。老な厭ひそ花心。
ワキ　さても大原山の花盛。貴賤羣集（きせんくんじゅ）の其中に。殊（こと）に年長けたる老人の花の枝を翳し。さも華やかに見えたる装。心有りける景色かな。そもいずくより来り給ふぞ。
シテ　思ひ寄らずや貴賤の中に。分きて言葉をかけ給ふは。さも心無き山賤（やまがつ）の。身にも応ぜぬ花好きぞと。お笑ひあるか人々よ。姿こそ山の鹿（かせぎ）に似たりとも。心は花になさばこそ。ならばならめや心からに。
同音　をかしとこそは御覧ずらめ。よしや此の身は埋木（うもれぎ）の朽ちは果てしなや心の。色も香も知る人ぞ。知らずな問はせ給ひそ。
ワキ　あら面白の戯やな。よも真には腹立ち給はじ。いかさま故有る心詞の。奥ゆかしきを語り給へ。
シテ　何と語らん花盛。いふに及ばぬ気色をば。いかがは思ひ給ふらん。
ワキ　げにげに妙なる梢の色。映ろふ影も大原や。
シテ　小塩の山の小松が原より。煙る霞の遠山桜。
ワキ　里は軒端の家桜。
シテ　匂ふや窗（まど）の梅も咲き。
ワキ　茜さす日も紅の。
シテ　霞か。
ワキ　雲か。
シテ　八重。
シ・ワ　九重の。
同音　都辺はなべて錦となりにけり。なべて錦となりにけり。桜を折らぬ人し無き。花衣着にけりな。時も日も月も弥生。合ひに合ふ眺かな。げにや大原や。小塩の山も今日こそは。神代も思い知られけれ。神代も思い知られけれ。
ワキ　面白き人に参り逢ひて候ものかな。いづくまでも同道申し花を眺めう

栞＝木の枝を折って地に立て帰り道の印とすること。ここでは枝を手折ってとの意。
年経れば齢は老いぬ然はあれど　花をし見れば物思ひもなし＝古今集藤原良房
春の日の光に当たる我なれど　頭の雪となるぞ詫びしき＝古今集文屋康秀　今日見ずは悔しからまし花盛　咲きも残らず散りもはじめず＝鞍馬天狗より
形こそ深山がくれの朽木なれ　心は花になさばならめや＝古今集兼芸法師　姿こそ山の鹿に似たりとも　心は花になさばならめや＝未詳　君ならで誰にか見せん梅の花　色をも香をも知る人ぞ知る＝古今集紀友則
大原や小塩の山の小松原　はや木高かれ千代の影見ん＝後撰集紀貫之
都辺はなべて錦となりにけり　桜を折らぬ人しなければ＝藤原定家
大原や小塩の　夢山も

ずるにて候。また只今口ずさみ給ふ歌は。大原や小塩の山も今日こそは。神代の事も思ひ出づらめ。今所から面白う候。これはさて如何なる人の御詠歌にて候ぞ。

シテ　事新しき仰（おおせ）かな。これは此の大原野の行幸に供奉（ぐぶ）し給ひし時。在原の中将業平の御詠歌ぞかし。忝くも后の御身の昔を思ひ出て。神代の事とは詠みしとかや。申すにつけて我ながら。そら恐ろしや天地の。神の御代より人の身の。妹背の道は浅からぬ。

同音　名残小塩の山深み。名残小塩の山深み。上りての代の物語。語るも昔男。あはれ古りぬる身の程。歎きてもかひ無かりけり歎きてもかひぞ無かりける。げに山賤のさしもげに。げに山賤のさしもげに。しばふる人と見ゆるにも。心有りける姿かな。

シテ　心知られればとても身の。姿に恥ぢぬ花の友に馴れてさらば交らん。

同音　交れや交れ老人の。心若木の花の枝。

シテ　老隠るやと翁さん。

同音　翁しの袖を引きひかれ。此面彼面（このもかのも）の陰毎に。

シテ　貴賤の花見。

同音　輿車（こしくるま）の。花の長枝を翁し連れて。よろぼひさずらひ。とりどりに廻る盃の。天も花にや酔へるらん。紅埋（うず）む夕霞。陰ろふ人の面影。ありと見えつつ失せにけり。ありと見えつつ失せにけり。〔中入〕

ワキ　不思議や今の老人は。ただ人ならず見えつるが。さては小塩の神の代の古跡。和光の影に業平の。花に映じて衆生済度の。姿現し給ふぞと。

ワ・連　思ひの露もたまさかの。思ひ露もたまさかの。光を見るも花盛。妙なる法の道の辺に。猶も奇特を待ち居たり。猶も奇特を待ち居たり。

シテ　**「一声」**月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。我が身ぞ旧（もと）の。身も知らじ。

ワキ　不思議やな今までは。立つとも知らぬ花見車の。やごとなき人の御有様。

シテ　これは如何なる人やらん。げにや及ばぬ雲の上の。花の姿はよも知らじ。ありし神代の物語。思ひ出づるや昔男の。心表すばかりなり。

ワキ　あら有難の御事や。他生の縁は朽ちもせで。

シテ　契りし人も様々に。

ワキ　思ひぞ出づる。

シテ　花も今。

同音　今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし。今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし。消えずはありと。花と見ましやと詠ぜしに。今はさながら花も雪も。皆白雲の上人(うえびと)の桜。翁しの袖触れて花見車暮るるより。月の花よ待たうよ。

シテ　**「序」**それ春宵一刻値千金。花に清香月に陰。惜しまるべきは唯此時なり。

「サシ」思ふこと言はで唯にや止みぬべき。我に等しき人しなければ。とは思へども人知れぬ。心の色はおのづから。思内より言の葉の。露品々に洩れけるぞや。

「曲(クセ)」春日野の。若紫の摺衣。忍ぶの乱れ。限知られずと詠ぜしに。

今日こそは　神代のことも思ひ出づらめ＝伊勢物語七十六段

源氏物語賢木の巻に「このもかのもに怪しきしばふる人ども」

鶯の笠に縫うてふ梅の花　折りて翁さん老隠るやと＝古今集源常

天も花に酔へる＝和漢朗詠集菅原道真の詩。この句は「田村」にも見える。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ　我が身一つはもとの身にして＝伊勢物語四段

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし　消えずはありとも花と見ましや＝伊勢物語十七段

春宵一刻値千金＝蘇東坡の詩句。「田村」にも見える。

思ふこいといはでぞただにややみぬべき　我とひとしき人しなければ＝伊勢物語百二十四段

陸奥の忍ぶ捩摺（もじずり）誰故に乱れ初めにし。我ならなくにと。
詠みしも紫の色に染み香に愛でしなり。又は唐衣。着つつ馴れにし妻
しあれば。遥々来ぬる旅をしぞ。思ふ心の奥までは。いさ白雲の下り
月の。都なれや東山。これも亦東の。果てしなの人の心や。

シテ　武蔵野は。今日はな焼きそ若草の。

同音　妻も籠れり我も亦。籠る心は大原や。小塩に続く通ひ路の。行くへは
同じ恋草の。忘れめや今も名は。昔男ぞと人もいふ。

シテ　昔かな。

「序ノ舞」

同音　昔かな。花も所も月も春。

シテ　ありし御幸を。

同音　花も忘れじ。

シテ　花も忘れぬ。
心や小塩の。
山風吹き乱れ散らせや散らせ。散り迷ふ木の下ながらまどろめば。桜
に結べる夢か現か世人定めよ。夢か現か世人定めよ。寝てか覚めてか
春の夜の月。曙の花にや残るらん。

春日野の若紫の摺衣
忍の乱れかぎり知られず＝伊勢物語初段
陸奥の忍ぶ捩摺誰故に　乱れそめにし我ならなくに＝古今集源融
唐衣着つつ慣れにし妻しあれば　遥々来ぬる旅をしぞ思ふ＝伊勢物語九段
武蔵野は今日はな焼きそ若草の　つまもこもれり我もこもれり＝伊勢物語十二段
君や来し我や行きけんおもほえず　夢か現か寝てか覚めてかかきくらす心の闇にまどひにき　ゆめ現とはこよひさだめよ＝どちらも伊勢物語六十九段